

奥多摩のせい



奥多摩

《第12号》

平成21年1月15日
奥多摩観光協会

～ 季節 だより ～

巡りめぐってまたひとつ歳をとったと感じるのは、まさに歳のせいでしょうか。

冬、奥多摩を訪れる人は、めっきり減りませんが、今回は、趣向を変えて文化財・民俗関係のおすすりめ行事を紹介します。

JR鳩ノ巣駅から徒歩15分ほどのところに棚沢集落のお不動様が古くから祀られています。今年の正月は、初不動ということで24日の晩と25日にご開帳され、地元の方々が参詣し、この日だけお姿を見ることができます。25日は、僧侶による読経や地元婦人による御詠歌などがあり、終日不動堂の前で火が焚かれ参詣者と酒を飲み交わして過ごします。寒中のこと、内外から体を温めて話に花が咲きます。地元の方々との出会いや山の話から経済や政局に至るまで話は尽きません。寒い季節ですから十分に着込んで暖かい服装でお出かけください。地元の方たちは、おすすりめ上手がそろっています。くれぐれも飲みすぎにご注意あれ。急坂で転んでもお不動様は助けに駆けつけてくれません。

本来、不動明王は大日如来の化身といわれ、緊急事態時にものすごい形相で駆けつけてくれるのだそうです。ですから、自分の不始末やお金を貸してくれといっても助けてはくれないでしょう。

なお、このお不動様については、奥多摩町文化財資料集「奥多摩町の文化財」に三面六臂の寄木造、材質不明、像高1.67m、光背高2.3m、岩座高17cm、作者不詳。五大明王の一つ金剛夜叉明王ともみられる三面不動尊立像で平安時代末期作と記されています。

平安時代の末期といえば、末法思想や密教が大流行した時代です。ここ奥多摩でも人々は心の安寧を求めて不動尊に参詣したものと思われる。

時代的には、青梅市成木、安楽寺に五大明王の

三面不動尊



木版画：安藤修二

一つ軍荼利明王（都指定文化財）と飯能市高山不動の軍荼利明王（国指定文化財）があります。ともに普段公開されていませんが機会があれば、ご覧になっておくと良いでしょう。鳩ノ巣棚沢のお不動様もこれらと時代を同じくするものとされていますが、さらに綿密な調査が待たれます。

（岡崎 学）

～ 疾 走 っ せ ん ～

巨樹・巨木と鍾乳洞

日原鍾乳洞バス停から橋を渡って右手の小川谷を600mほど歩くと日原鍾乳洞に着く。鍾乳洞の中は、年間を通じて11℃のため、夏は涼しく冬は暖かい。そのため、日原鍾乳洞の入口に立つと、洞窟の中から冷気が吹き出てくるのを感じる。夏は、一瞬に暑さを忘れ、とても心地が良い。

日原鍾乳洞には、巨大なカエルを思わせるガマ岩や、水琴窟では、厳かな雰囲気の中、耳を澄ますと、透明で優雅な水琴の音を聞くことができる。

3cm伸びるのに200年かかるという鍾乳石も見られ、洞内は狭い所、不思議なほど広い所があったりと楽しく飽きない。日原鍾乳洞前の一石山神社境内は木々に囲まれ、休憩にも絶好。また、日原鍾乳洞から200mほど上流へ行くと広々とした河原へ降りられ、ここで梵天岩を眺めながらお昼を食べるのも、渓谷美の中、爽やかな気分になれる。

併せてお勧めが白原の巨樹・巨木。日原鍾乳洞バス停の方向へ戻り、バス停前の橋を渡らず、日原林道を行く。日原溪流釣り場と石灰石採石場を通過し、日原

鍾乳洞から40分ほど歩いた辺りの右手にガ二沢のカツラの巨樹がある。林道上には案内は無いので、石灰石採石場を500mほど過ぎた辺りを意識して見ると、巨樹が斜面上に立ち、巨樹への道筋も見えます。ガ二沢のカツラは樹高31m、幹周り7.1m、樹齢推定400年の巨樹である。

ここで楽しんだら日原鍾乳洞バス停へ戻り、日原森林館および東日原バス停を目指し歩を進めるが、途中に道路脇の急な崖から湧き出ている名水「柄のしずく」がある。その上を見上げるとトチノキの巨樹が堂々とそびえている。そして、是非とも寄って欲しいのが、倉沢のヒノキである。樹高33m、幹周り4.8m、樹齢推定約1000年のヒノキの巨樹は、東日原と川乗橋の間の倉沢バス停で下りる。車道に大きな案内板があるので迷うことなく、15分程急な山道を登っていくと、巨大なヒノキの前に辿り着く。ヒノキの好みの環境にあるためか、推定樹齢が1000年のヒノキの巨樹とは思えないほど、若々しい樹勢に驚きと感激を感じる倉沢のヒノキである。

(小川 恵子)

～ 行 っ て 疾 走 っ せ ん ～

関東ふれあいの道 (棒ノ嶺から名坂峠)

10月7日、前日の雨が昼前にはあがったのだが、下見の時の様子から、ぬれた岩や木の根が、すべるのではないかと心配だった。8時集合に遅れる人もなく21名は清東橋から歩き始めた。思いのほか乾いていた上、健脚ぞろいで心配は無用だった。

百軒茶屋を過ぎて山道に入るといきなり急登が続く、左右にワサビ田を見ながら山名由来の祠まで一気に登る。この祠に祀ってある石と棒ノ折山の由来を聞きながら一息入れ、続く急登に備えた。

この山は登り口から山頂まで、ゆるやかな坂は全くなく、ぐんぐん登っていく。スギやヒノキの人工林で広葉樹林は少ない。陽ざしはさえぎられるが変化には乏しく、ただ一歩一歩を進めるのみ。

人工林を過ぎると間もなく山頂。11時前には山頂に着いた。

ススキが揺れ、サクラなどいくらか色づき始めている。広々とした山頂からは遠くの山なみが良く見える。昼食、休憩の後、山々の説明をしてもらった。下山の前にストレッチ。この下山コースは短い急坂

が何回もある変化にとんだ長い行程だ。特に山頂直下は階段の土が流れ、ハードル競技さながらの状態が続く、横の林内に道が出来てしまっている。

黒山山頂を通り、逆川の丸も通過し、登り下りの繰り返しが続く。左側の急斜面の人工林は枝打・間伐がゆきとどいてすがすがしい気分になる。この道は「山草の道」と名づけられているけれど、今はもう花が少ない時期になっていた。

ガクウツギ、コアジサイ、クロモジが多いので、これらの花の季節は楽しい道になるだろう。

13時40分過ぎ、ようやく名坂峠に着いた。目の前の急坂を登ると岩茸石山の山頂なのだが、今日は登らず下山する。細くて崩れそうなところがあり、慎重に降りていく。15時前には下山できた。近くにある輪光院に寄り、宝暦の箱訴事件の説明を聞いた後、国際マス釣場で休憩した。

参加者全員、歩き通したという満足感で足取りも軽く、川井駅までの道をたどった。駅の手前で整理体操、反省会を行い、16時過ぎに解散した。

(西川 晴美)

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その10 ～

「山野井泰史君、熊とかく闘えり」

日当りの余り良くない、〈奥多摩むかしみち〉沿いの古い民家を借りて、ひっそりと暮らしていた稀代のクライマー、山野井泰史、妙子夫妻を、もう少し暖かい所に移そうと、奥多摩の仲間が探し当てた今の住まいに、山野井夫妻が移り住んだのは4年程前である。ヒマラヤのギャチュンカンから壮絶な生還を果たし、凍傷で失った手足の指の静養に当たっていた時期のことであった。

新しい住居は山裾の高台で、眼下には奥多摩湖が広がり、その対岸に奥多摩三山のひとつ御前山がドッシリと対峙している。また住居の背後には倉戸山が控え、家の脇の階段はその登山口ともなっている。南向きの傾斜地は日当たりが良く暖かい、「熱海」の地名はそこからきていた。

彼らは手術した翌年の夏から再び山にチャレンジを始めた。ハンディを克服しようと、自分たちの登れる山を模索しながら、国内でのトレーニングを続け、中国の未踏の岩壁に2年にわたり通って登り切った。昨年はグリーンランドの大岩壁を登り、NHK、BSハイビジョンでその記録が2時間にわたり全国放映された。夜の番組〈NHKスペシャル〉でも「夫婦で挑んだ白夜の大岩壁」の題名で何度か放映されたから、山を知らない人たちにも、彼らの「生き方」は強烈な印象を与えた。

今年の夏も、ふたりは50日間、中央アジアのキルギスに遠征し、7010メートルのハンテングリ峰と、1000メートルを超えるビッグウォールをふたつ登って、8月下旬に帰国した。

私はふたりが帰って来たことは知っていたが、しばらく訪ねる機会がなかった。9月16日、仕事が終わってから山野井家に顔を出した。ちょうど妙子さんは友人と北海道に行っており、山野井君がひとり所在なげに自宅にいた。

私は上がりこんでキルギスの山の話などを聞いた後、懇意にして頂いている道路下の室川さん宅にふたりでおじゃました。とりとめもない話を1時間ほどして、その日は家に帰った。

翌17日、私は午前8時すぎに奥多摩交番に出勤した。交番勤務員が無線で通信指令本部と何事か通話していた。「ヤマノイ・・・クマ・・・」と聞こえた。「何、どうした。山野井君がどうかしたのか」と聞くと、勤務員は「山野井さんが熊

に襲われました」と言う。「どこでだ」「倉戸山だそうです。いま相勤員と山内さんが臨場してます」と言う。私は素早く救助服に着替えながら勤務員から110番の概要を聞いた。119番からの転送らしく、午前7時ころ山野井君が倉戸山をジョギング中、子連れの子熊(ツキノワグマ)と遭遇し、腕と顔面を襲撃された。何とか逃れて自宅まで戻り、依頼された隣の住民が119番通報したようだ。生命に別状はないという。消防庁ではヘリで病院に運ぶと言っている、とのことであった。

私は「現場に行ってくる」と勤務員に言い置いて、山岳救助車で青梅街道を飛ばした。妙子さんもないし、ご両親への知らせなどもある。何とか軽傷であって欲しいと祈るのみであった。途中救急車とすれ違った。これに乗っているのだろうかと思ったが、とりあえず自宅の方に行かなければ状況が把握できない。そのまま急いだ。15分ほどで山野井宅に到着した。先着した警察官が2名、隣家の松島さん夫妻から事情を聞き取りながら通信指令本部に報告を続けていた。松島さんも興奮しながら状況を話しており、自宅の庭や玄関付近に点々と血痕が付着していた。先ほど途中ですれ違った救急車に山野井君は乗っており、消防庁のヘリポートへ向い、ヘリで青梅市立総合病院に運ぶはずという。

私は道路下の室川さん宅に顔を出し、室川夫妻に詳しい状況を聞いた。室川夫妻が松島さんからの連絡で道路に出たとき、山野井君は自宅から階段を下り、室川さんの駐車場に座り込んでいた。駐車場を血で汚したことをさかんに詫びたという。救急車が来ても自宅から道路まで20段もの階段があるので、救急隊が下ろすのが大変だろうと、道路まで降りて来ていたものだろう。緊急時においても些細なことにまで気を遣う男である。

室川さんの話では山野井君の鼻はもげそうになっており、血だらけの傷の脇から白い鼻骨が見えていた。鼻は皮一枚でかろうじて顔に付いている状況だったという。到着した救急車に乗っても、渡された連絡先への電話を何度も頼まれたので、山野井君のご両親、北海道の妙子さんなどへの連絡は済んでいるという。これから病院に向うという室川さんに、私も後刻病院に顔をだす旨を伝え一旦交番に戻った。

山野井君と熊との遭遇はどんなものであったろうか。後日談である。朝7時過ぎ、山野井君は

日課のトレーニングに出た。妙子さんがいないのでいつもより早い起床だった。自宅下の道路から、家の脇の階段を上がっていくと温泉神社の前に出る。そのまま真っ直ぐ登っていけば倉戸山であるが、そこから右に折れて、数百メートル下の奥多摩湖岸の国道に沿ってほぼ水平に走ることのできる林の中の遊歩道がダム上まで続いている。山の斜面は、増えている鹿が山を荒らさないように鹿避けのネットが張り巡らされている。遊歩道も金網のゲートで仕切られているが、自由に開け閉めして出入りすることができる。

走り出して 10 分程のところにあるゲートを開けて入り 50 メートル程走ったとき、ふと前方からこちらに向かって走ってくる獣が見えた。「ソッ、カモシカかな?」「???」。獣は唸りながらこちらに向かい走ってくる。「グワー」と吠えた。「熊だ」。獣の後に小さな子熊の姿も見えた。山野井君は素早く反転しようとしたが間に合わず、熊に跳びかかれ、右上腕に噛み付かれて山側に引き倒された。覆い被さってきた熊は人間の大人ぐらいの大きさだった。山野井君は恐怖の中、必死の反撃を試みる。大声を上げながら左手の肘を熊の顔面に打ち付ける。遊歩道の谷川は急な斜面になっており、飛び降りることはできない。耳の側で聞く熊のすごい唸り声と荒い呼吸。野生の獣の臭い。猛り狂った母熊の顔が目の前にある。この恐怖は経験したものでなければ分からないだろう。熊の手は身体のあらゆるところに爪を立て、こんどは山野井君の顔面に噛み付いた。ちょうど鼻のあたりである。唸りながら顔を振る。鮮血が飛び散る。必死で肘打ちを続けるが、これ以上続けたら鼻を食い千切られてしまう。痛みと恐怖で何度も意識が飛びそうになる。抵抗をやめた。フッと力を抜いたら、熊も顔を離した。「今だっ」両足に渾身の力を入れて蹴りこんだら熊と身体が離れた。山野井君はすかさず起き上がり後方に走った。脇目も振らず走った。熊の唸り声と、ときどき「ウォー」というような吠える声が聞こえた。金網のゲートの所で後ろを振り向いた。まだ後を追っては来ていたが、熊もまた追い付いて攻撃しようという意思は見られなかった。とにかく姿が見えなくなるまで走った。

後ろを振り向いたら熊はいなかった。山野井君は鼻を押さえながら歩いた。手を離せば鼻が落ちてしまいそうなほどに食い千切られていた。「気持ちをしっかり持たなければ」と思った。ここで意識を失ったら、妙子さんはいない。誰も探しに来てくれる人はいない。「何とか家まで辿り着かなければ」とフラフラしながら歩いた。

30 分程歩いて自宅に辿り着き、隣の松島さん宅に駆け込んだ。血だらけの山野井君の姿を見て驚いている松島夫妻に、手短かに事情を話し救急車の要請を依頼した。自分は自宅に帰り、健康保険証や現金、両親や妙子さんの連絡先、仕事の打合せで今日会う約束をしている人の連絡先などをまとめて袋に入れた。多量の出血により意識がなくなることを心配したのであった。どんな状況下にあっても的確な判断と冷静な行動をとることができるということが、世界最強のクライマーと言われる側面でもあろう。

午前 11 時 30 分ころ、私は青梅市立総合病院に到着した。ヘリで運ばれた山野井君はまだ治療中で、治療が終わったら ICU (集中治療室) に入るという。ICU の待合室には室川さんの他、山野井君のお姉さん、友人などが待機していた。そして世界的クライマーの事故を知ったマスコミ関係者が、大勢病院に駆け付けていた。

午後 0 時 30 分ころに千葉から山野井君のご両親が駆け付けた。別室に呼ばれ、医師から説明を受けているようだった。

4 時間にも及んだ処置が終わり、午後 1 時 30 分医師の記者会見が行われた。テレビや新聞のマスコミも 6 社ほど来ていたようだ。私は制服のままなので記者会見には出なかったが、後で会見の内容を室川さんに聞いたところ、傷は顔面と右腕を合わせて 90 針の縫合したという。医師は感染症を心配して、2 日間は ICU に入り、感染症がなければ一般病棟に移って、1 週間ほどで退院できるのではないかと saying していたという。

午後 1 時 40 分、妙子さんが北海道から駆け付けた。ホールにいた私を見つけて走って来て「どうです。鼻大丈夫ですか」と聞くので、「医者は何とか付くのではないかと saying していたよ」と答えたら、妙子さんもホッとした様子だった。

この事故はマスコミの反応も素早かった。テレビや新聞が大きく取り上げた。事故後数日間、猟友会が東京都の許可を得て、熊駆除のため小河内ダム上の遊歩道や倉戸山に入って熊を探した。しかし未だ熊を発見したという通報はない。

自分が当事者では大きな声で言えないだろうが、昆虫や魚なども含め、鳥、犬、猫、など、動物大好きな山野井君だから、「この事故で駆除される熊が増えるのではないだろうか」とか「あの熊の親子も、無事逃げおおせてくれればいいが」などと心配し、病院のベッドの中で複雑な毎日を送っているのではないだろうか。

(青梅警察署山岳救助隊 副隊長 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(12)

氷川は、かつて氷川郷と称し、青梅市梅郷と日向和田から以西、小河内の境までの広い地域にわたっていました。本村にあたる氷川村は、大正3年に町制をしく動きがありました。果たせず、昭和15年に氷川町となりました。当時の西多摩郡内では、青梅町、五日市町に次いで3番目の町でした。

昭和30年には、古里村、小河内村と合併して、東京都の9分の1の面積となる山林の町、奥多摩町となりました。この旧氷川村の小字(小名・こあざ)は、39ヶ所あります。

寛文8年(1668)の検地には、現在家号として残っているものを含めて数多くの小字がありました。明治9年の地租(土地の税金)改正の際に整理統合されて、現在のようになりました。地名は、もともと住人の共通の目印として、都合よく付けられているものです。大きく分けると地形、気象、方位、物、神仏や人の名前などです。寛文検地から氷川地内の地名をいくつか拾い出してみますと、「日向」は、日

向きのよい場所に付けられています。ここには、「しよなあだ(初縄田)」という場所がありますが、村の検地の時、最初に縄入れをした所、また、しよっぱな陽があたる所のことともいわれています。「ななまかり(七曲がり)」は、カーブの多い地形で、狼落としという断崖絶壁があり、昔、狼が獲物の鹿などを追い落とした場所といわれていました。現在は、奥多摩温泉もえぎの湯がある所として知られています。「こんからとうじ(金迦羅童子)」は、この童子が祀られている所をさし、制叱迦童子(せいたかどうじ)と同じ不動明王の脇侍(きょうじ)です。「弥次郎さす」の「さす」は、この地方に広く行われてきた焼畑のことで、弥次郎が開墾した焼畑のことで、「夕日あたり」は、他の所は日が翳ったのに、「そこだけ日が当たっている所をいいます。「不老(ふろう)」は、風呂の転化で陽だまりにある井戸から水蒸気が上がっている状況を、風呂から湯気が立っている様子に擬えて、風呂(不老)と付けられたといえます。【資料】奥多摩町誌、広報おくたま(岡部義重)

山の花だより

冬の森

冬に入り、ブナやヤマコウバシのように遅くまで枝にしがみ付いていた葉が落ちてしまうと、森は一気に淋しくなります。そうです。季語で言い表す「山、眠る」状態になります。

でも、そんな冬の森ですが、よく観察すると、けっこう面白い姿を見出すことができます。

※ 熊棚(くまだな)

コナラやミズナラの林で梢あたりを見上げると、枯れ葉の塊がしっかりと付いている場合があります。落葉する前にできた塊ですが、なぜ、出来たのでしょうか。

実は、この枯葉の固まりは、ツキノワグマがナラの実であるドングリを食べた痕跡なのです。

クマは細い枝まで登り、手の届く範囲の実の付いた枝を手繰り寄せ、実を食べます。引き寄せられた枝はポキッと折れ、その枝を自身のお尻の下に敷き、また次の枝を引き寄せ実を食べます。こうして、生きた葉が付いたままの枝が折り重ねら

れ棚が出来ます。これを熊棚とか熊座と言います。

紅葉の準備ができて葉は、葉の根元に「離層」と呼ばれるコルク質の層ができ、必ずその冬までに落葉します。しかし、その準備が出来ていない状態で枯れると、葉は落ちずに1年以上も枝にしがみ付き、熊棚は冬には良く目立ちます。

※ ヤドリギ

ナラやクリの梢に緑色の球形の塊が付いている姿を見かけることがあります。これは、ヤドリギと呼ばれる寄生植物です。しかし、葉緑素を持っているため、自身でも光合成を行います。そのため、このような植物を「半寄生植物」と言います。

寄生されている樹木に葉が付いているときには目立ちませんが、落葉後はよく目立ちます。晩秋には美しい半透明の黄色や橙色の実を付けます。粘着質の実はキレンジャクやヒレンジャクが好んで食べます。この種は、糞の中でも粘り気を失わず幹上にくっつき、新しい場所で芽生える戦略を持っています。

(堀越弘司)

ガイドだより ～奥多摩の有害昆虫雑感～

数年来、地球温暖化現象や自然環境の変化によって、昆虫を始めとする動物の発生・分布・行動に関する生態系の異変を専門誌が報じている。

さて、幸いにも、観光ガイドが活動中、有害動物に遭遇した事故についてはないが、身近な有害昆虫からの危険回避について、ガイドの多少の体験から話題提供を試みたい。

先ずは人を襲う事故が最も多いスズメバチ、アシナガバチ（アシナガバチ科16種）、ミツバチ科（セイヨウ、ニホン、クマバチ）に代表されるハチの仲間から取り上げたい。一般に地中とか木の洞や廃屋の軒下などに巣を作るが、中でもオオスズメバチは最も大きく、毒も強くて危険なハチである。毒針を持っていて、刺されると毒嚢からヒスタミンやセロトニンなど、痛み痒みを起こす物質や神経麻痺毒が注入され、局所は激痛と腫れが生じる。慌てると毒素は血流から脳に入り、めまい、頭痛に変わる。

危険なのは再度刺されると、アレルギー反応（アナフィラキシーショック）によって吐き気、血圧降下、呼吸困難、意識消失など重篤症状が起こることもある。現場での応急処置は①局部を絞りよく洗う。

②毒針が見えたら抜き取る（特にミツバチは毒嚢と針が残るので、毛抜きで取り去ることが必要）。③あれば抗ヒスタミン含有ステロイド軟膏を塗って早急に病院へ直行する。刺されないためには①巣に近づかない。②明るく白系統の服装で、香のある化粧品や、発酵食品の携行を避ける。

ハチ以外の昆虫では、アブやブユの仲間は奥多摩山中では夏季に結構うるさい。恒例になった小学生の三頭山ガイドでは、山頂付近での昼食時はとくに、アシマダラブユの大歓迎に悩まされる。大発生するときは払っても払ってもしつこい。感受性の強い子は、イライラと皮膚の発赤、痒みを訴えた。最近では、忌避材（ジアチルアミド含有リペレント）や、抗ヒスタミン剤軟膏携帯の先生が一般的になった。これらの昆虫に好かれないうためには、弁当にも前述した発酵食品を携帯しないこと。アブでは黒っぽい脚が白いイヨシロオビアブ、黄色いキンイロオビアブは大発生するときは人への嗜好性が高く、登山者の休息時やキャンプ時にはヒトスジシマカ（天狗熱媒介か？）やヌカカの吸血に注意しよう。



（大谷 武彦）

施設案内

◆ 山のふるさと村

奥多摩町川野 1740 番地

秩父多摩甲斐国立公園内にある都民の水がめ、奥多摩湖畔にある山のふるさと村では、園内のケビン冬季の間、特別割引でご利用いただけます。

平成 21 年 2 月 28 日まで

4 人用 1 泊：10,000 円が 5,000 円

8 人用 1 泊：20,000 円が 10,000 円

お申込み・お問合せ 0428-86-2324

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、冬から春に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号（2 名様まで）を明記の上、奥多摩観光協会へ。（抽選の場合あり）

- ① 3 月 27 日（金） 海沢カタクリと史跡探訪
応募締切日 3 月 10 日（ハイキング）
- ② 4 月 3 日（金） 数馬の切り通しと海沢の
カタクリを見る
応募締切日 3 月 18 日（ハイキング）
- ③ 4 月 10 日（金） むかしみちに春の植物を訪ねる
応募締切日 3 月 18 日（ハイキング）

募集人員：各回 30 名、参加費：500 円

※ 4 月 10 日（金） 山開き式前夜祭
午後 7 時から 氷川キャンプ場
参加費：1,000 円（飲食代）

※ 4 月 11 日（土） 山開き式
午前 8 時から 奥多摩駅前

《 編集後記 》

明けましておめでとうございます。

今年も奥多摩をよろしく！

次号は、平成 21 年 4 月 15 日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会